

一一ノ二七、嘉永癸丑吉田松陰遊歴日録

出典 嘉永癸丑吉田松陰遊歴日録、昭和十年二月 吉田松陰全集第七卷に所収 自筆原本は松陰神社蔵

解説 幕末の麒麟児、吉田松陰(当時寅次郎)が嘉永六年、藩主の命により江戸遊学の旅に出た。四国から大阪、伊賀、伊勢から中山道を経て江戸に入ったが、この時奈良から伊賀上野への途上、笠置を通過した。

海外に目が向いていた寅次郎には、過去の南北朝の遺跡は興味がなかったようである。笠置を通過した寅次郎は「笠置、後醍醐天皇の行在、山勢頗る険」と記すのみで、登山したか否かは判然としない。

原文

癸丑(注・嘉永六年)正月廿六日、卯時発萩城、家兄伯教、及佐々木小亀・高洲又・玉木彦送吾、到大谷繩手、赤川淡亦迎吾于天神祠前、相與至大谷繩手告別、独久保清、送至三田尻、此日、雨寒路滑、所経諸地、皆平日熟路、別無可記者、酉時投警固街飯田氏、普喜新熊亦至、同宿焉

(中略)

(嘉永六年(一八五三年)五月五日の条)

五日、晴、発奈良、入山城、経加茂・笠置・大川原・嶋原、宿上野、行程九里、加茂以往皆藤堂侯所領、独大川原則柳生侯所領也、大川原、嶋原之間、為山城、伊賀界、奈良以往、皆丘陵高下、絶無平田曠野、至上野、地形稍開廓、笠置駅前、横絶一川、是為木津川、下川十八里、即大阪也、笠置後醍醐天皇行在、山勢頗険、山下隔一川而有二聚落、一為南笠置、一為北笠置、北笠置、即余所経也、土人云、山南飛鳥路村、二十戸許、元弘之役以為賊徒陶山小見山導、至今他村人民、不與通婚嫁、村中亦有皆党賊之家二戸、傍有嶋城、当時朝倉佐兵衛所守也、木津之上流、至嶋原再渡、至上野三渡、並謂之伊賀川、上野有城、藤堂采女居焉

六日、曇、発上野

(以下省略)

読み下し文

癸丑(注・嘉永六年)正月廿六日、卯時萩城を發す。家兄伯教、佐々木小亀・高洲又・玉木彦吾を送る。大谷繩手に到り、赤川淡亦吾を迎う。天神祠の前、相い與に大谷繩手に至り別れを告ぐ。独り久保清、三田尻に至りて送る。此日雨寒しく路滑る。所経諸地、皆平

日熟路、別無可記者、酉時投警固街飯田氏、普喜新熊亦至、同宿焉

(中略)

(嘉永六年)五日晴。奈良を發ち山城に入る。加茂、笠置、大川原、嶋原を経て、上野に宿、行程九里。加茂以往皆藤堂侯の所領、独り大川原則ち柳生侯の所領也。

大川原、嶋原の間、山城、伊賀の界を為す。奈良以往、皆丘陵高下し、平田、曠野絶無なり。上野に至り地形稍開廓す。

笠置の駅前、一川横絶す。是木津川と為す。下り十八里にて、即ち大阪也。笠置は後醍醐天皇の行在なり。山勢頗る険、山下に一川を隔てて二聚落有り。一に南笠置と為し、一に北笠置と為す。北笠置即ち余の経る所也。

土人云う。山南の飛鳥路村、二十戸許り。元弘の役に以て賊徒陶山、小見山を導くを為す。今に至るも他村の人民、婚嫁を通ぜず。村中に亦賊に党せざるの家二戸有り。傍らに嶋城有り。当時朝倉佐兵衛守る所也。

木津の上流、嶋原に至り再渡す。上野に至り三渡す。並びに之を伊賀川と謂う。上野に城有り、藤堂采女の居城なり。

六日、曇、上野を發す。

(以下省略)